

大田区立郷土博物館 海苔商の誼訪 貴重な資料

大田区立郷土博物館

農閑期の出稼ぎで底力蓄える

特別展に合わせ図録発行

江戸・東京の海苔の産業に大きく関わり貢献、活路を開いた誼訪の海苔商。その海苔商にも焦点を当てた特別展「海苔商たちの底力」が大田区立郷土博物館（東京都大田区南馬込）で開かれた。特別展に合わせ同博物館は図録

「忘れ去られた史実がよみがえり、後世に残したい貴重な資料」として注目されている。大田区の海苔づくりは江戸時代中頃から大森、品川の沿岸部で始められ、明治以降は生産量、品質の高さが全国か

ら認められ、「本場乾海苔」と称された。しかし東京港の改修などから1962（昭和37）年、長年続いた養殖は終わりを告げた。特別展は海苔の生産が終了して60年を経た昨年、12月3日までの2カ月間開かれ、大

森や東京の海苔商たちの足跡を振り返った。その中で海苔の伝播などに貢献した信州誼訪も重視、誼訪大社や惣持院（茅野市）などが所蔵する資料を展示。北島和孝誼訪大社宮司や今井誠誼

訪信用金庫会長ら、誼訪からも多くの人たちが鑑賞に訪れた。図録「海苔商たちの底力」は7章と資料編で構成。第4章「誼訪／行商集団の活躍」は約50点の写真を掲載、10ページにわたって誼訪の海苔商の歩みを紹介している。「出稼ぎは間接的に藩財政を潤すものと、高島藩は便宜を図った」「誼訪の海苔商たちは『御湯花講』という集団を結成して結束を図った。また静岡や和歌山でも海苔産業に尽力したこと」に触れている。父親が米作りの作間、海苔の生産に従事したという誼訪

市中金子の岩波弘之さん（76）は、「多くの資料や丁寧な取材を基に編集され、歴史を語る貴重な資料。現存する海苔商18店について創業、経営、誼訪との関係を記した資料には驚いた」、同市大熊の藤森憲一さん（76）は「子どもの頃から出稼ぎの話聞き、湖南村史などからも興味を持った。図録で点が線になり、先人の偉業をより知る機会になった」と話している。

（宮坂早苗）



図録「海苔商たちの底力」。第4章「誼訪～行商集団の活躍～」は誼訪の人々が海苔産業の各分野で活躍した様子が語られている



大田区立郷土博物館を訪れ特別展を鑑賞。図録で誼訪の海苔商により関心を深める岩波弘之さん（左）と藤森憲一さん（右）

大田区立郷土博物館を訪れ特別展を鑑賞。図録で誼訪の海苔商により関心を深める岩波弘之さん（左）と藤森憲一さん（右）